町史とっておきの話 276

いま残しておきたい只見とっておきの話 ③

―三石神社の芭蕉句碑と只見の俳人たち―

只見町文化財調査委員会議長
飯塚　恒夫

芭蕉の句碑が、縁結びの神として信仰を集める三石神社の参道脇に建っています。駐車場から鳥居をくぐり、一〇〇メートルほど登ったところにある苔むした自然石がそれです。長く風雪に耐えながら、なお残る深い彫り痕を見ていると、いにしえを静かに語りかけているかのようです。

秋農野や
　草の奈可ゆく
　　水乃音
　　はせを

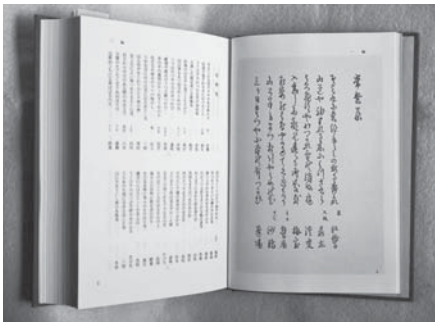
碑面にはこのように刻まれ、それ以外の文字は裏面にもなく、いつだれが建てたのか、句碑建立の経緯については、いまだ分かっていません。これだけの句碑を建てるには、少なくとも只見地方に、俳諧の愛好者が相当大勢いなければできないことです。しかし、只見地方に残る古文書などの中からは、俳諧活動を知る資料は今のところ確認されていません。

▲三石神社参道に建つ芭蕉の句碑

ところが、新潟県の見附地方史研究会が、平成十年に復刻した『常磐集』という本の中で、幕末期の只見俳人が投稿していたのを発見したのです。これをきっかけに、長い間の疑問が少しずつ分かってきました。『常磐集』は、見附で活躍した俳句宗匠の六合庵茶山が、天保一三（一八四二）年から、越後をはじめ全国より俳句作品を募って出版した作品集です。天保一三年以降毎年編さんされており、文久元（一八六一）年まで二〇年にわたり発行されたものです。

只見地方の俳人たちは、この常磐集に嘉永年間から投句しています。俳諧史の上では、寛政から幕末までを後期俳諧の大衆化時代と言われます。会津地方ではこの時期、若松や喜多方を中心に活動がさかんでしたが、周辺の地域は、柳津・田島あたりまでが交流範囲で、只見地方は俳諧の空白地帯となっていました。この発見によって、只見地方は経済ばかりでなく文化活動においても越後の文化圏と深く交流していて、会津俳壇とは別に独自の活動を展開していたことが分かったのです。

『常磐集』に掲載されている形態は、作品・住所・名前の順ですが、名前はすべて俳号を用いているため、本名は分かりません。しかし、中には「叶津・越境關」のように、叶津番所の長谷部氏と推定できるものもあります。本に載っている名前のすべてを記載してみます。


▲只見の俳人が投句していた『常磐集』

只見の雪幸・梅松・雪花・草季・万花・蓬勢・梅子・野中・梅柳・盛山・初女・梅願・梅朝・梅什・荻哉・研斎・研龍・研海・聲水・月西・幸女・其璞・研玉・紫濤・啓処・文常・澄秋・可翠・旭湖・研魯・雪尾・川月・庭松、叶津の越境關、田子倉の春月、石伏の石浅・石洲、田ジマの亀松、丹藤の豊湖。

以上の三九人が投句していますが、本名の分る方がおりましたら、教えていただきたいと思います。

このように、幕末期の只見地方に三〇人余の俳人が活躍していたことは確かなことです。そこから、冒頭の芭蕉句碑建立に只見地方の俳人たちが何らかのかたちで関わったであろうことが容易に推測されます。

この只見俳壇の活動は、見附の茶山と交流する以前に、大白川新田の庄屋浅井氏との交流があったと思われます。浅井氏とは八十里越・六十里越を通じ古くから只見と深い関係があり、浅井氏は俳号を旭川と号し、文化年間に「旭川舎」を結んで小出郷の俳諧指導にあたっています。只見俳壇の活動期がこの時期と重なるところから、只見俳壇の誕生には、少なからず浅井氏の影響があったと思われます。

また旭川舎連は、天保一四（一八四三）年に芭蕉翁百五十年忌を修し、入広瀬に「芭蕉句碑」を建てています。見附・栃尾でもこの年建てています。なお、この年は八十里越の大改修が行われた年で、両地方の交流がもっともさかんな時期でもありました。三石神社の芭蕉句碑は、ひょっとすると、この時期に建立が計画されたのかも知れません。